様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 30 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19520703
研究課題名（和文）新疆モンゴル地域における自然認識の動態に関する文化人類学的研究
研究課題名（英文）Anthropological Research on the Perception of Nature among the Mongols in Xinjiang
研究代表者
シンジルト（SHINJILT）
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：00361858

研究成果の概要（和文）：新疆モンゴル牧畜地域には、特定の家畜を売らず屠らずその命を自由にするセテルという慣習がある。セテル家畜の扱い方に関する人々の解釈はその世代や地域によって異なるが、全体としてはセテルを行うのがよいとされる。動植物を含む万物の中に幸運を意味するケシゲという存在があり、セテルを行えばケシゲが集まるという認識こそ、彼らの自然認識の基礎を成す。この認識の特徴は幸福を追求することにある。そこで、幸福は人間だけでは達成しえないことが分かる。

研究成果の概要（英文）：In the Mongolian pastoral area of Xinjiang, there are many domesticated animals designated not for sale or slaughter. They are called *seter mal*. The herders' interpretation about how to treat *seter mal* various, but they all agree that *seter* is a good thing. The custom of *seter* is associated with *kesig* which refers to fortune that exists in everything including animals and plants. *Kesig* is the basis of the herders' perception of nature; it is also a prerequisite for happiness. It is believed that if *seter* is performed, *kesig* will gather. The fundamental purpose of *seter* is therefore to collect fortunes and pursue happiness, for they cannot be attained by human power alone.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学
キーワード：自然認識、文化人類学、新疆モンゴル地域、世代、ケシゲ、家畜、幸福

１．研究開始当初の背景

(1) 牧畜文化の位置づけ

長い間、我々は、狩猟採集、牧畜、農耕、産業といった表現をもって、人間の生業のあり方を描き、またその順序で人間社会の発展や進化の過程を単線的に理解してきた。とりわけ国境の不可侵を信条とする国民国家の文脈でいえば、その移動の特性から牧畜は時代遅れだけでなく、牧畜社会で生起する諸慣習（いわゆる文化）は人類進歩の障害物として、常に克服されるべき対象であった。

他方、近年人類が共通に直面する環境問題の文脈では、農耕や産業社会に比べて、牧畜社会による自然環境への負荷が少ないとの知見が一部に受け入れられはじめ、牧畜文化の再評価もみられる。しかしこのような好意的な再評価でさえも、外部者の視点に属するものであり、必ずしも当人たちの論理に基づいてその文化の在り方をリアルにとらえたものではない。このように、科学的にもイデオロギー的にも葛藤の焦点の一つとなっている牧畜社会における文化のダイナミックスを理解することが、人類学のみならず、人文社会科学全体にとっても重要となる。

(2) 自然認識の位置づけ

人間は、その歩んできた長い歴史において様々な仕方で自らを取り巻く自然環境と関わってきた。いかなる人間集団も、身の周りの自然環境に対してある種の働きかけを行い、特定の生活様式を紡ぎだし、それを維持していこうとする。こうした傾向は該当集団の自然認識に反映される。おのずからあるものである「自然」と、その「自然」との関わりにおいて存在する人間自身に対する認識が自然認識だとすれば、その自然認識は、決して「静的」なものではない。むしろ様々な要素が複雑に絡み合いながら、一つの社会文化現象として変化していく「動的」なものである。明文化されたものとは異なって、牧畜社会におけるその自然認識のありかたはきわめて流動的で、その特長は日常生活の細部においてしか観察できないという点にある。さらに同じ慣習であっても、それをめぐる人々の解釈の仕方は、そのおかれている地域によって、世代によって異なる場合が多い。しかしこのことは、彼らが恣意的に自らの慣習を認識し実践しているということを意味しない。というのも、こうした認識や実践を支えている特定の論理があるからである。

(3) 特定の慣習とその論理

他のチベット仏教地域同様、新疆モンゴル牧畜地域あるいは元牧畜地域においては、屠られない家畜、伐採されない樹木といったモノが遍在している。その理由に関する人々の説明は、その細部においては多種多様であり、時には相互矛盾でさえある。共通にいえるのは、そうしたモノを「セテル *seter*」と称することと、「そうするのがよい」ということである。「セテル」という言葉は、ほとんど誰でも知っている。セテルの語源はチベット語の「ツェタル *tshe thar*」ともいわれるが、現地においてその字義を知る人はほとんどいない。彼らにとって、セテルの語源や字義よりも、セテルをすることのほうが重要である。彼らの間では、セテルは単に名詞としてというより、「セテルラフ」(セテルをすると の意)のように動詞化された形態で、あるいは「セテル・マル」(家畜の場合)、「セテル・モド」(樹木の場合)のように複合名詞として使われるケースが多い。抽象的な観念というより、具体的な実践の中においてはじめて、セテルは人々にとって意味をなす。その実践における登場者の一方は人間側で、他方は動植物やその他の存在を含む自然側である。セテルは人間と自然が関わりあう実践の一つである。セテルは、自らの所有財の使用の一部を放棄することを意味する実践である。この実践は、「そうするのがよい」というシンプルな理解に支えられている。一見して不思議に思われるこの実践はどのように現れ、それに与えられた人々の説明はなぜばらばらなのか、それでも「そうするのがよい」というのはどのように理解すべきなのか。

２．研究の目的

本研究は、自然と社会をめぐる人文社会科学領域における先行研究を批判的に継承しつつ、文化人類学的なフィールドワークの方法を用いて、中国新疆ウイグル自治区のモンゴル族諸社会にみられるセテルという慣習に焦点を当てながら、(1) その住民の世代間や地域間にみられる自然認識の差異について考察し、(2) そうした諸差異の存在にもかかわらず、人々と動植物との関係を律するような、社会全体に流通している共通の論理を抽出することを目的とするものである。

３．研究の方法

現在、内陸アジアの自然環境破壊の問題が注目されている。特に砂漠地帯を多く抱える新疆ウイグル自治区の自然環境はデリケートである。他方、新疆は豊かな地下資源をもつゆえに、国家から強い関与を受けてきた。さらに、新疆には多民族、多宗教が並存し、社会文化的に複雑な様相を呈する。

新疆で居住する 13 の主要民族の一つであるモンゴル族は、18 世紀末までに清とロシア帝国と拮抗しながら、中央アジアを一世紀余り制覇し地域全体の生業、民族、宗教の分布に深く関わってきた。現在モンゴル族人口が新疆全体に占める割合は 1 パーセント未満で低いものの、モンゴル族による民族自治地域面積は、新疆全体の三割強を占める。こうした歴史的背景をもち、少数民族の中の少数民族という現状にある彼らが、広い空間において、いかに自然と関わってきたかを理解することで、本研究の目的を達成するために適切な研究対象となる。

一口に新疆モンゴル族といっても、おかれ

ている歴史的社会的な状況によって、その下位集団の間に相違がみられる。ホボクサイル＝モンゴル自治県とバヤンゴル＝モンゴル自治州の主体はトルゴド部族で、ボルタラ＝モンゴル自治州の主体はチャハル部族である。両者とも清朝に対して忠誠を示した、あるいは清朝の新疆攻略に貢献したとみなされてきた歴史をもつ。これらとは異なり、民族区域自治権をもたないのが、イリ・タルバハタイ・アルタイの三地域に暮らすモンゴル諸族である。そこで、本研究は、自然認識をめぐる新疆モンゴルの全体状況を把握したうえで、主として、ホボクサイル＝モンゴル自治県と、民族区域自治権をもたない上記 3 地域における現地調査と文献収集を進めた。

４．研究成果

(1) カザフ族との関係

本研究の対象となる 4 地域ともに地域的マジョリティであるイスラム系のカザフ族に取り囲まれており、日常生活の各側面においていわゆるカザフ族の影響が強くみられる。住人のなか、母語以外カザフ語が堪能の者が多く、カザフ語教育を受ける者も少なくない。また、家畜の屠り方は、首を切るようになっており、周囲のイスラム系カザフ人とは同じ屠畜の方法である。カザフ人とは互いの冠婚葬祭に参加したり、また少数ながら通婚したりするようなケースもみられる。

そして、セテルという慣習についていえば、それ自体は、カザフ族の間にはない。しかしセテルは、モンゴルとカザフとの民族集団間の境界を維持するためにシンボリックなものとして、起用されることもない。

(2) 世代間の相違

いずれも国境付近に位置するため、常に国家による愛国主義や国民統合のためのイデオロギー教育の最前線となった。現在、新疆全域で実施されてきた双語（バイリンガル）教育改革によって、少数民族言語を切り捨て、実質上漢語による学校教育を受ける生徒が上記 4 地域でも増えている。

そのため、伝統離れの若者も増え、民族文化が危機的状況にあるという意識も現れている。とりわけ地域の老人たちからは、現在の「若者」は、伝統としてのセテルも知らないと指摘されがちである。しかし病などのきっかけで、実際セテルをするようになった「若者」もいる。

(3) 地域間の相違

歴代中央政権との異なる関係を背景に、民族区域自治権を獲得した地域とそうではない地域があり、伝統文化をめぐる制度的な位置づけには、明瞭な地域間格差がある。民族区域自治権の名の有無によって地域集団間に社会差異が生じている。

多くのモンゴル族人口を抱えながら民族区域自治権をもたない地域では、牧畜民の間で行われているセテルをめぐる諸実践は、あくまでも信仰にまつわる私的な行為とみなされがちだ。それに対して、ホボクサイル＝モンゴル自治県では、セテルは自治県の無形文化財に登録されるなど、地方行政府の保護を受ける。そこでのセテル実践は、宗教や信仰のみならず、時として地域振興にも貢献しうるものとされる。

そのため、4 地域におけるセテル慣習のありかたは完全均一なものになっているのではなく、その形式においては一定相違がみられる。とりわけ、民族区域自治権をもたない地域においては、諸制約のためセテル実践を行なうことがもはやできないと説明する人たちもいる。そこで、セテルにとって代わる別の実践もあるとされる。

しかし、セテルを支える論理は、地域間の相違を超えて存在し、共有されているのは確かであり、さらに、いわゆるセテルにとって代わる別の実践とセテル実践との間にも、共通する論理を見出すことができる。

(4) セテルをめぐる実践

セテル実践は、セテル儀礼を行なうことから始まる。セテル儀礼を受けた家畜はセテル家畜となる。ここでは便宜上、家畜、とりわけ最も一般的に行われる羊のケースを取り上げ、その様子を概説する。まず、人々が何らかの理由で僧侶に対してセテルする要望を申し込み（また何らかのきっかけで僧侶にそうするようにいわれる場合もある）、それを受けて僧侶は、セテルを行う時間や羊の特徴を決定する。

そして儀礼の当日、僧侶を招き読経してもらう。その間、主は羊を泉水など綺麗な水で清め、それから、僧侶の前に連れてくる。そこで僧侶は、まずアルツ（香）の煙でその羊を再度清める。そして、頭・額・背中・四肢・尾の順でバターを塗りつけながら読経をし続ける。最後に清められたザラマ（リボン）を羊の首に結び付ける。その後、当の羊は元の群れに戻される。これで儀礼は終了する。

セテル儀礼を受けた家畜の個体は、それまで属していた群れの中で特別な存在とみなされる。特別なのはいくつかの約束事によって保証されているからだ。セテル家畜を屠ったり売ったりすることはもとより、その毛を刈ったり（羊・山羊）、それに乗ったり（馬・牛）することもできない。要するに、セテルとなったモノに対して人間は手を出さない。人間にできるのは、群れの中でいつでも自由に練り歩くセテル家畜が老衰し自然死する

まで、その永続していく姿をひたすら見守っていくくらいである。既存のセテルが死んだら、その後継者として新しいセテルが生まれる。色など、特徴の共通するものが選ばれる。

他方、問題となるのは、老衰したセテル家畜を更新することが可能かどうかという点である。地域や個人によっては、すでにセテル儀礼を受けて老衰した家畜を、別の若い家畜に更新することが可能だという見方もある。セテル・ボーラガフという。動詞のボーラガフは「下ろす」なので、セテルの地位から引き下ろして普通の羊に戻すことを意味するだろう。更新する際には、新旧セテルの口をあわせて、唾や息を継承するのだといった更新方法もあることをアルタイ地域などで聞いたことがある。さらに、下ろされたセテル家畜は普通の家畜と同じく屠って食べてもよいという説明もある。しかし、実際筆者は、そうしたことのある人とはあったことはなかった。また、更新してもよいという見方には、否定的な態度を示す人の方が多数を占める。というのは、ケシゲを呼び寄せるための家畜は、そのいかなる使用も認められておらず、自然死するまで、見守られるべきというのが約束事だからであろう。これらの約束事は人間の行動を規制するもので、一種の禁忌とも言える。

(5) セテル実践の論理

①ケシゲ追求の方法

では、人間がなぜ進んで自らの行動を規制するのか。それに関する説明は多種多様だが、結果的にその理由は、「そうするのがよい」という一言で言い表せる。セテルをするのがよいという理由は、すべてのモノ、つまり人間および人間以外の家畜、樹木、土地などあらゆる自然の中に、ケシゲが遍在するという認識に支えられている。

例えば、馬のケシゲはタテガミに、山羊や羊あるいは牛のケシゲは尾にあるといった具合である。そのため、家畜を売るときにはそれらの毛を少しとっておく。そうすれば売ったとしてもそのケシゲは残る。

ケシゲ自体はニュートラルなあるいはあいまいなものではなく、運気以外に幸運、恵み、気品、幸せなどポジティブなもののみを指す語である。自然界にもケシゲがあるというのは自然界に対する擬人化ではなく、最初からあるためである。ケシゲの前では、自然と人間は対等である。

あるものの中のケシゲが多ければ、そのものは強くなる。逆の場合、弱まる。従って、ケシゲを呼び寄せたりそれをより強化したりすることは、当然いつになっても重要である。ケシゲのためには、セテルをするのが必要となり、「そうするのがよい」というわけである。そこで、人間にとってケシゲを追求するための方法の一つがセテルといえよう。

②セテルのようなもの

セテルは、ケシゲを追求し、幸福を達成するための方法であれば、論理的にセテルの対象は必ずしも家畜に限定される必然性はない。実際、ケシゲの論理に基づき、直接的間接的にセテルと関わりをもつ、家畜以外の動物および動物以外のものなどが存在する。

まず、家畜以外で、セテルになる動物は犬である。セテル犬は家畜を所有しない寺院などでみかける。そして、植物の中で、セテルの名をもつものとしては、しばしば登場するのは樹木である。それを人々は、セテル樹木という。泉を祭る際に、その周辺にある樹木が、セテルの対象になる確率が高い。そうした樹木にザラムを結びつけておけば、それがセテル樹木となる。もし木がなければ、草でもよいというわけである。

さらに、地域では、泉を祭ることをボラグ・セテルラフともいう。「セテルラフ」は「セテルする」との意である。動物などと同義の命を有しない泉もセテルするというのである。このように、セテル家畜と同じく、「手を出してはいけない」という扱いを受けるものは、それが「非生物」の泉であっても、セテルの名のもとで説明される傾向がある。

ただ、泉という名詞とセテルという名詞を、直接組み合わせた言語表現は実際ないため、ここで泉のことを、「セテルのようなもの」だと表現しておいたほうがより適切かもしれない。

泉の事例からは、命あるものに限らず、「ケシゲのあるもの」はセテルの対象になるということが分かる。ケシゲのあるものは、生物に限ることはない。ここでは生物と非生物との境界もあいまいになる。この境界のあいまいさは、上記の家畜と犬との境界、動物と植物との境界のあいまいさに対応する。

そもそも、動物と植物、生物と非生物は別物なので、家畜以外の領域におけるセテルの適応は論理的矛盾であるといえるかもしれない。しかし、あらゆるものの中にケシゲがあるという認識領域においては、その矛盾は存在しない。セテルを理解するため、境界の明確さに拘束されることは、生産的ではないことが分かる。

③幸福のありかた

ケシゲの追求、幸福の実現がセテル実践の目的であれば、論理的にその目的を実現するためにセテル以外の方法もあるはずである。ケシゲとセテルの組み合わせも、必然的なものではない。事実として、筆者が対象としている地域の全ての人間がセテルしているわけではなく、とりわけ、アルタイ地域やタルバハタイ地域などにおいて、儀礼を僧侶が少

ないこと、そして農耕化したため家畜が減少したことなどを理由で、セテル家畜の数が少なく、いわばセテルという慣習自体が、弱化しているようにみられる。

こうした地域において、現在セテル家畜は少ないものの、キーモリは必ず各家にある。キーモリは、建物の屋上などに、高く掲げる四角い旗のことである。旗の中心に馬の絵が描かれてあり、その周囲にチベット語の経文や仏像がある。絹や布製のものが多く、風に舞うことで、願い事が成就するとされる。モンゴル語で、「キー」は空気や大気など、「モリ」は馬を意味する。キーモリを直訳すると風の馬だが、意訳すると幸運となる。キーモリを掲げておくと家に幸運を招き入れるとされている。

本人たちにとって、キーモリという言葉の意味は、旗のような形あるものに留まらない。旗とは別に、キーモリは、精神、気運、繁盛、壮健、威勢、荘厳、福運などのような無形なものも意味する。こうした無形なキーモリは、セテル行為が依拠する無形なケシゲとほぼ合致する。ケシゲの有形化がセテル家畜であるとすれば、セテル家畜に対応するのが旗としてのキーモリである。古くなってしまったキーモリ旗を更新しないといけないことは、亡くなったセテル家畜の後継者を選ばないといけいということ、あるいは老衰したセテル家畜を若いセテル家畜に更新しないといけないということにも、対応している。

旗としてのキーモリは、人間の住居だけではなく、オボー（土地の主を祭る高台）にも掲げられている。実際現在、オボーに行ければ、その人のキーモリンが上昇すると認識する人が増えているからである。この場合のキーモリは、有形のキーモリではなく、無形なキーモリのほうである。多くの人がオボーに行くことを喜ぶ。それには若者も含める。また、近年、オボー自体の数も増えており、地域における建築技術の進歩により、新築されたオボーの多くは鉄筋コンクリート製で、半永久的なものになっている。さらに、昔に比べて今は、女性に開放するオボーも増えているのも、その特徴である。

このように、諸事情によって、セテルを行なうことができなくなった牧畜民や元牧畜民の住人たちにとって、キーモリを掲げたりオボーを祭ったりするような方法をもって、彼らの幸福追求という目的を達成することが重要である。キーモリの更新やオボーの維持は、セテルの更新と維持にもつながる。この際のキーモリとオボーは、それまでに比べて、セテルの役割も果たすなど、より広い意味合いと期待を担うようになっているといえよう。それぞれの論理においてはキーモリとオボーは、セテルと大差はないからである。そのいずれも、幸福追求のためのものである。彼らにとっての幸福は、人間社会内部のみで達成しえないからである。

（6）実践論理の位置づけ

セテルは、牧畜民がケシゲという認識を実践のなかに表現していく際の一形式である。それゆえに、彼らにとって、セテルの語源や字義の重要性は二の次であり、実用されるのはその動詞形などとなる。また、表現の一形式であるがゆえ、セテルをめぐる表象の間口は広い。その儀礼にしばしば僧侶が関わるため宗教的なものとして、それが登場する地域がテュルク系諸民族に取り囲まれているためエスニックなものとして、それを行う当人たちの個別的な説明が多様であるため贖罪や利己的なものとして、その対象範囲が人間以外の動植物までを含むため自然環境にやさしいものなどとして、幾重にも表象することは可能であろう。ただこれらはセテルという行為現象の表層をなぞるものに過ぎない。

セテルを基礎から支えているのはケシゲである。牧畜民や元牧畜民たちにとってのケシゲという認識は、それがおかれる自然環境、従事してきた生業のなかで獲得された「自然認識」の一つと言えよう。ケシゲは、おのずからあるものである「自然」だけではなく、その「自然」との関わりにおいて存在する人間自身に対する認識でもある。後者において、幸福追求としてのケシゲの本質がより顕著に表れる。

ケシゲのために、セテルをすることがよいとみる彼らにとって、無論、よいものやよいことはほかにも多くある。それらは例えば、よい気候・よい牧草地（換言すれば、耕地や企業）・よい家畜（農作物や製品）・よい肉（収穫量や賃金）・よい健康状態・よい家庭・よい子ども・よい人生といった具合に、ほかのどこの社会の人間とも変わらないような事物や物事ある。ただそれらは、異なるカテゴリーに属し、互いに内的な関連が希薄である。

牧畜民や元牧畜民である彼らにとって、それらを繋げるのが、ケシゲという認識で、セテルという行為である。諸存在によいものとしてケシゲが遍在し、そのためにセテルを行うのがよいということの意味は、あらゆるよいものを相互に活性化し、あらゆるよいことを統合することにある。

そういう意味で、セテルは、人間、家畜、動物、植物、泉、原生林、人工林、旗、高台、有形と無形なものなどの間を行き来しながら、ケシゲを追い求める運動の一形態であるといえる。言い換えれば、セテルは、分類カテゴリー全体を超越したうえで成り立つ現象である。当然、セテルをめぐる現象領域においては、「社会」と「自然」の境界は、明示的ではなく、不要である。さらにいえば、ただちに、エスニシティ、イデオロギー、政

治政策などに代表される「社会的なものの」に還元できないのが、セテルである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①シンジルト　2011「牧畜民にとってのよいこと：セテル実践にみる新疆イリ＝モンゴル地域の自然認識の動態」、『中国 21』、査読無、第 34 号：135-162 頁、愛知大学現代中国学会編
②シンジルト　2008「王柯著『２０世紀中国の国家建設と「民族」』」（書評論文）『中国研究月報』、査読無、3 月号、62（3）：43-48 頁

〔学会発表〕（計６件）
①シンジルト「聖なる動物が解き明かす自然と人間の関係：個体性、日常性、持続性」、日本文化人類学会、第 44 回研究大会（2010 年 6 月 12 日、新座：立教大学）
②シンジルト「聖なる動物の扱い方：チベット仏教社会における自然認識の動態」、熊本大学大学院社会文化科学研究科・F_R セミナー『自然と文化のインタフェース』（2009 年 12 月 19 日～20 日、熊本：熊本大学）
③シンジルト「セテルをめぐる語り：新疆モンゴル社会の事例」、九州人類学研究会（2008 年 7 月 12 日、福岡：九州大学）

〔図書〕（計 5 件）
①シンジルト「セテルの動態：新疆北部における人畜関係の論理」奥野克巳編著『人と動物　駆け引きの民族誌』東京：はる書房（2011 年 9 月出版予定）
②シンジルト「オラーンムチル現象にみる内モンゴル・インパクト」、小長谷有紀・川口幸大・長沼さやか編、勉誠出版、『中国における社会主義的近代化：宗教・消費・エスニシティ』2010 年、185-217 頁
③ NASAYOSHI NAKAWO, YUKI KONAGAYA, SHINJILT (eds.), Peter Lang, *Ecological Migration: Environmental Policy in China*, 2010 (‘Introduction: Remote regions of western China and ″ecological migration″’, pp. 11-39; Chapter 10 Villagers’ perception of nature in relation to ″ecological migration″ A case studies of ″A″ village, Sunan Yogor Autonomous County, Gansu Province’, pp. 223-240)
④シンジルト「黒河中流域住民の自然認識の動態」、中尾正義・フフバートル・小長谷有紀編、東方書店、『中国辺境地域の 50 年：黒河流域の人びとから見た現代史』2007 年、105-126 頁
⑤SHINJILT ’Pasture fights, mediation and ethnic narrations: aspects of the ethnic relationship between the Mongols and Tibetans in Qinghai and Gansu’ in *The Mongolia-Tibet Interface: Opening New Research Terrains in Inner Asia*. Hildegard Diemberger and Uradyn E. Bulag (eds.) Leiden: Brill. 2007, pp.337-361

６．研究組織
(1)研究代表者
シンジルト（SHINJILT）
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：00361858